まちどころ

ー風景装置としての３つのバス停の提案ー

1 計画敷地

兵庫県宝塚市月見山。
宝塚駅周辺の華やかな印象とは対照的に、緑豊かな山林に囲まれた閑静な住宅街である。
標高 100m～150m の高台に開発された住宅街に 860 世帯、2127 人の人が暮らしている。買い物や病院などのインフラは駅前に依存しており、住民は日常的に山を上り下りしている。

2 バス停

現在、月見山では地域バス「ラランバス」が運行している。
道幅が狭くバス停周辺には道路に沿って標識とベンチがあるのみで、人の居場所としての機能性は低い。
一方でバス停周辺には風景を持つ空き地が残されている。
そこでバスルートを見直し未利用地にバス停を設計する。空き地を、風景を見つめる場として利用する。

3 設計手法

問題提起

風景は自分がその場にいることでしか感じられないものである。
住宅街が広がる月見山では、山を上り下りする日常の中に、様々な風景がある。
しかし、住人たちはそれを当たり前のものとして見落としてしまっている。
風景に目を向けることを通して、このまちで生きているという感覚を取り戻すことはできないだろうか。

提案

このまちを見つめなおすための場所として、バス停を提案する。
町の規模感になじむアイストップとして佇み、バスを待つという当たり前の体験の中で、風景に目を向けさせる。
当たり前の体験の中で、風景に目を向けさせる。
バスを待つという短い時間の中で風景を見ることで、住民たちの心の中にこのまちが生まれる。

4 ダイアグラム

それぞれのバス停における特徴的な風景に気づかせるため、視線の操作と行動の誘発をする。
バス停は風景を人々に知覚させるための装置としての役割を持つ。

のぼる

1

周囲の高さに合わせて壁をたてる

2

三分割し、周囲の壁に沿ってまわす

3

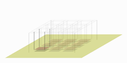
螺旋階段が全ての空間を貫く

みおろす

1

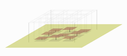
現存の緑を保ちながら床を吊るす

2



グリッド状に展開し緑と憩う

3



床高を操作し、緑と多様な距離をとる

みはらす

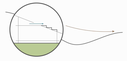
1

傾斜に沿った勾配で視線を誘導する

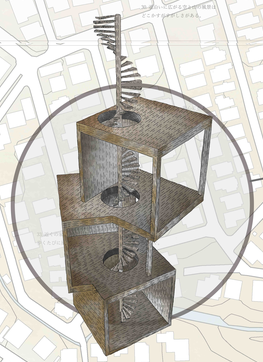
2

天井高を多様にする

3



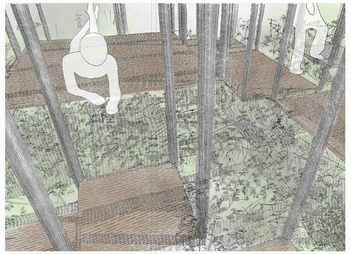
屋上に上がり風景を楽しむ

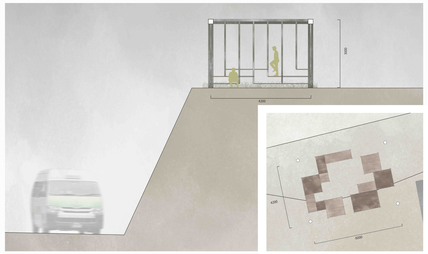


5 情景

みどり

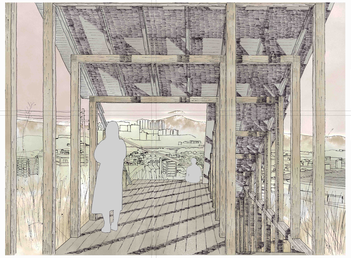
ねそべる、座る、しゃがみ込む、またぐ。
一連の行為を経て階段は意識しやすいみどりを見つめなおす。
階段から見えていた雑草が成長するにつれ、みどりの中に建築があるように見えはじめる。
主体が何かわからない中で、自分の存在を楽みる。

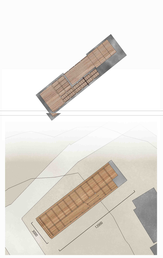


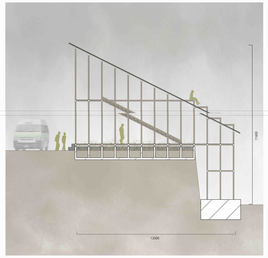


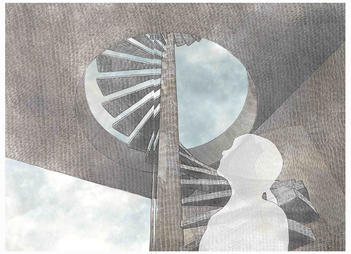
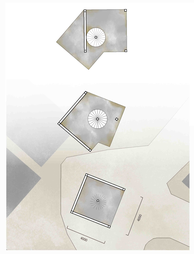
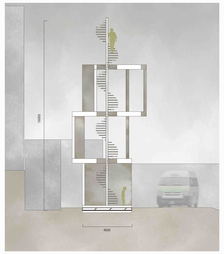
おかえり

階段を上がりつった先で、
向かいの山とふもとから伸びる道をながめ、
住民が帰ってくる場所である山の姿を確認し、
またここに帰ってくる人を
迎え入れる場所として広場と割れる。







のぼり

3階から螺旋階段の形にくり抜かれた空を望む。
壁がなくなり、
どこに向かうこともない階段を見て
何を思うのだろうか
建物は朽ちて縮びていっても
そらは同じ切り取られ方をして
何年たっても同じ空を出会う